

～観光における消費の促進や滞在時間を延ばすために～

令和3年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：観光客誘客に向けた観光消費を促進するためのコンテンツの構築
研究代表者：宮古短期大学部 教授・大志田憲
課題提案者：一般社団法人宮古観光文化交流協会 会長・桐田教男
研究メンバー：三村敬之（宮古短期大学部）高岩将洋（宮古観光文化交流協会）
宮井久男（岩手県立大学名誉教授）

- ・技術キーワード：観光、沿岸地域、ニーズ分析、現地調査

▼研究の概要

震災以降の県内沿岸部の観光客数は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、さらに落ち込んでいる状況である。また、個人・小グループへの旅行形態の変化によるニーズの多様化、地域の人口減少が進む中で、既存の観光資源の活用方法だけではなく、より観光消費を促進する、滞在時間を延ばす等の改善が望まれる。よって、これからの観光客となる若い世代が興味を持つ観光コンテンツを構築するため、学生による食・体験、五感等を中心とした現地調査、グループワークを通して課題検討を行った。

▼研究の内容

以下の内容で、宮古観光文化交流協会（以下観光協会）と協働研究を進めた。

- ・観光協会と学生による、沿岸部観光状況、課題の情報共有、意見交換
- ・岩手県観光統計概要、観光白書、日本交通公社旅行年報等による現状分析
- ・沿岸部における観光資源について、現地調査および参加学生へのアンケート
宮古地域：5月29日、参加学生10名
岩泉地域：11月15日、参加学生10名
山田地域：12月22日、参加学生9名
- ・アンケート集計結果をもとに、学生グループワークによる分析および観光コンテンツ案の提案



図1 現地調査



図2 グループワーク

▼研究の成果

以下に、学生が現地調査を行った観光資源に対するアンケート集計結果の一部を紹介する。

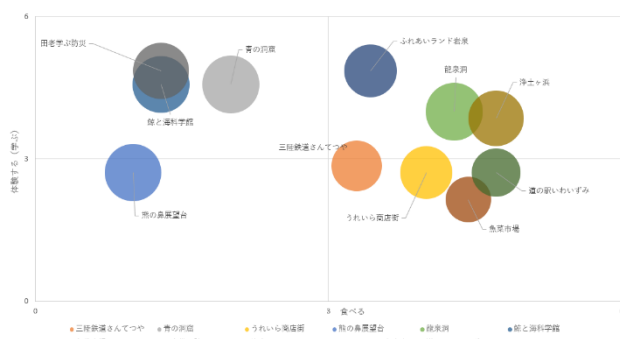


図3 各観光地の食べる・体験バブルチャート (バブルサイズ: 観る)

図3は観・食・体験アンケート結果をバブルチャートとして可視化したものである。このグラフは横軸が「食べる」、縦軸が「体験する」、バブルの大きさは「観る」となっている。これより、グラフの第2象限に位置する観光資源に食を加えるといった新規コンテンツ開発やルート構成等の工夫が考えられる。

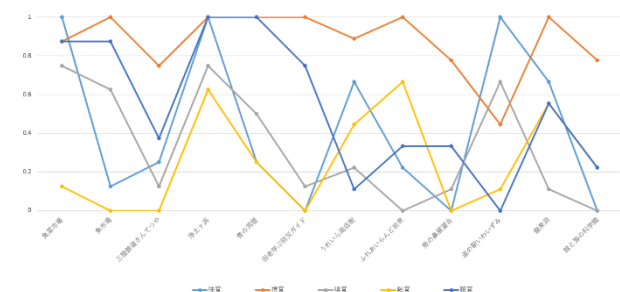


図4 観光資源に対する五感グラフ

図4は各観光資源の味、視、嗅、触、聴覚の五感についてのアンケート評価をグラフ化したものである。想定どおり浄土ヶ浜が高い結果が出ているが、観光消費、体験を増やしての滞在時間を増やすためには他の場所も含め、五感における触感が今後のポイントのひとつになると考えられる。

▼おわりに

新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、十分な現地調査ならびアンケート集計はできなかったが、各観光資源における「観る」以外の観光消費の促進、滞在時間を延ばすための他の観点である「食べる」、「体験する」あるいは、五感の調査を実施することができた。特に触覚の面での新たなコンテンツ作りも、今後の改善点のひとつであるとも考えられる。新たな観光資源の活用案については、提案の段階までではあったが、今後も継続して研究を続けていく予定である。

【謝辞】学生グループワークおよび観光学習にご協力いただきました、いわて若者カフェ並びにカフェマスターの下向理奈氏に感謝申し上げます。